

# Cauchy の行列式定理

2020.8.25 鈴木 実

## 1 はじめに

コーシーの定理といえば、コーシーの積分定理が最もよく知られているが、他にもあって、行列式の展開に関する公式も導いており、それもコーシーの定理と呼ばれている [1, 2] . ここではその導出と応用例を述べる .

## 2 Cauchy の定理

$a_{ij}$  を成分とする  $n$  次正方行列  $A$  の行列式を  $D^{(n)}$  とする . そのとき ,

$$D^{(n)} = (-1)^{r+s} a_{rs} D_{rs}^{(n-1)} - \sum_{j \neq r, k \neq s} (-1)^{\nu_1 + \nu_2} a_{rk} a_{js} D_{rj, ks}^{(n-2)} \quad (1)$$

が成り立つ . ここで ,  $\nu_1 = r + s + j + k$  で ,  $\nu_2$  は  $s > k$  のとき 0 ,  $s < k$  のとき 1 である . これを Cauchy の定理という .

## 3 導出

$n$  元 1 次形式  $f(x_1, x_2, \dots, x_n)$  について次の式が成り立つ .

$$f(x_1, x_2, \dots, x_n) = x_1 \frac{\partial f}{\partial x_1} + x_2 \frac{\partial f}{\partial x_2} + \dots + x_n \frac{\partial f}{\partial x_n} \quad (2)$$

一方 , 行列式  $D^{(n)}$  は第  $i$  行の要素  $a_{i1}, a_{i2}, \dots, a_{in}$  を  $n$  個の変数と考えると  $n$  元 1 次形式の関数とみなすことができる . 同様に第  $j$  列の要素  $a_{1j}, a_{2j}, \dots, a_{nj}$  を  $n$  個の変数と考えると  $n$  元 1 次形式の関数とみなすことができる . つまり , 行列式  $D^{(n)}$  は  $2n$  通りの  $n$  元 1 次形式の関数とみなすことができる .

行列式  $D^{(n)}$  を次のように交代数  $e_1, e_2, \dots, e_n$  を用いて

$$D^{(n)} = \prod_{i=1}^n (a_{i1} e_1 + a_{i2} e_2 + \dots + a_{in} e_n) \quad (3)$$

と表す [3] . この式を  $a_{rk}$  で偏微分すると ,

$$\frac{\partial D^{(n)}}{\partial a_{rk}} = \prod_{i=1}^{r-1} (a_{i1} e_1 + a_{i2} e_2 + \dots + a_{in} e_n) e_k \prod_{i=r+1}^n (a_{i1} e_1 + a_{i2} e_2 + \dots + a_{in} e_n) \quad (4)$$

となることがわかる . ここで , 式の中央にある  $e_j$  を互換により式の前頭までもつてくると ,  $e_k e_k = 0$  により各行の  $e_k$  はすべて消えることと , それ以外の交代数との互換により  $(-1)^{k-1}$  の符号が付けられるが , 再度元の位置まで戻すと , 今度は  $e_k$  以外の交代数に関して同じ互換により同じ符号変化があるので , 結局 , 符号の変化はなく , ただ  $e_k$  の左側の  $e_k$  は消える . 次に ,  $e_k$  を互換により式の後尾に移動すると ,  $e_k$  の項は消えて , それ以外の交代数の  $n - r$  回の互換により  $(-1)^{n-r}$  の符号がつく . 結局 ,

$$\frac{\partial D^{(n)}}{\partial a_{rk}} = \prod_{i=1, i \neq r}^n (a_{i1} e_1 + \dots + a_{i, k-1} e_{k-1} + a_{i, k+1} e_{k+1} + \dots + a_{in} e_n) (-1)^{n-r} e_r \quad (5)$$

となることがわかる．この式を見ると，符号  $(-1)^{n-r}$  の前の部分は  $r$  行  $k$  列を取り除いた小行列式  $D_{rk}^{(n-1)}$  であることがわかる．したがって，

$$\begin{aligned}
\frac{\partial D^{(n)}}{\partial a_{rk}} &= \prod_{i=1, i \neq r}^n (a_{i1}e_1 + \cdots + a_{i,k-1}e_{k-1} + a_{i,k+1}e_{k+1} + \cdots + a_{in}e_n)e_r(-1)^{n-r} \\
&= D_{rk}^{(n-1)} e_1 e_2 \cdots e_{k-1} e_{k+1} \cdots e_n e_k (-1)^{n-r} \\
&= D_{rk}^{(n-1)} e_1 e_2 \cdots e_{k-1} e_j e_{k+1} \cdots e_n (-1)^{n-r} (-1)^{n-k} \\
&= D_{rk}^{(n-1)} e_1 e_2 \cdots e_n (-1)^{r+j} \\
&= (-1)^{r+k} D_{rk}^{(n-1)}
\end{aligned} \tag{6}$$

となる．

上の結果を用いて，行列式  $D^{(n)}$  の第  $r$  行の要素  $a_{rk}$  ( $k = 1, 2, \dots, n$ ) を  $n$  個の変数とみなし，これに式 (2) を適用すると，

$$\begin{aligned}
D^{(n)} &= a_{r1} \frac{\partial D^{(n)}}{\partial a_{r1}} + a_{r2} \frac{\partial D^{(n)}}{\partial a_{r2}} + \cdots + a_{rn} \frac{\partial D^{(n)}}{\partial a_{rn}} \\
&= (-1)^{r+1} a_{r1} D_{r1}^{(n-1)} + (-1)^{r+2} a_{r2} D_{r2}^{(n-1)} + \cdots + (-1)^{r+n} a_{rn} D_{rn}^{(n-1)} \\
&= \sum_{k=1}^n (-1)^{r+k} a_{rk} D_{rk}^{(n-1)}
\end{aligned} \tag{7}$$

となることがわかる．

次に， $D_{rk}^{(n-1)}$  の第  $s$  列の要素  $a_{js}$  ( $j = 1, 2, \dots, n; j \neq r$ ) を  $n-1$  個の変数とみなしてこれに式 (2) を適用するのであるが，その前に準備として小行列式  $D_{rk}^{(n-1)}$  を  $a_{js}$  で偏微分してみよう．まず， $D_{rk}^{(n-1)}$  を交代数で表すと，

$$D_{rk}^{(n-1)} = \prod_{i=1, i \neq r}^n (a_{i1}e_1 + \cdots + a_{i,k-1}e_{k-1} + a_{i,k+1}e_{k+1} + \cdots + a_{in}e_n) \tag{8}$$

となる．これを  $a_{js}$  で偏微分する．ただし， $j \neq r$  かつ  $s \neq k$  でなければならない．

[1]  $s > k$  のとき，

$$\begin{aligned}
\frac{\partial D_{rk}^{(n-1)}}{\partial a_{js}} &= \prod_{i=1, i \neq r}^{j-1} (a_{i1}e_1 + \cdots + a_{i,k-1}e_{k-1} + a_{i,k+1}e_{k+1} + \cdots + a_{in}e_n) \\
&\quad \times e_s \prod_{i=j+1, i \neq r}^n (a_{i1}e_1 + \cdots + a_{i,k-1}e_{k-1} + a_{i,k+1}e_{k+1} + \cdots + a_{in}e_n)
\end{aligned} \tag{9}$$

となることがわかる．式 (5) のときと同じように，式中央の  $e_s$  を互換により式の先頭に持って行くことにより  $e_s$  が消え，また戻すことにより符号は元に戻る．結局，中央の  $e_s$  の左側の  $e_s$  の項はすべて消える．次に， $e_s$  を式の末尾まで互換により移動すると， $e_s$  は消え， $j+1$  行から  $n$  行まで互換が  $n-j$  回あるから全体の符号が  $(-1)^{n-j}$  に変わる．したがって，

$$\frac{\partial D_{rk}^{(n-1)}}{\partial a_{js}} = \prod_{i=1, i \neq r, k}^n (a_{i1}e_1 + \cdots + a_{i,k-1}e_{k-1} + a_{i,k+1}e_{k+1} \cdots a_{is-1}e_{s-1} + a_{is+1}e_{s+1} + \cdots + a_{in}e_n) e_s (-1)^{n-j} \tag{10}$$

となる．この式で，末尾の  $e_s(-1)^{n-j}$  を除いた部分は，元の行列式  $D_{rk}^{(n-1)}$  から第  $j$  行と第  $s$  列を除いた小行列式になっていることがわかる．あるいは  $D^{(n)}$  から第  $r, j$  行と第  $k, s$  列を除いた小行列式になっているとも

いえる．したがって，これを  $D_{rj,ks}^{(n-2)}$  と表す．そうすると，上の式は，

$$\begin{aligned}
\frac{\partial D_{rk}^{(n-1)}}{\partial a_{js}} &= \prod_{i=1, i \neq r, k}^n (a_{i1}e_1 + \cdots + a_{i,j-1}e_{j-1} + a_{i,j+1}e_{j+1} \cdots a_{i,t-1}e_{t-1} + a_{i,t+1}e_{t+1} + \cdots + a_{in}e_n)e_s(-1)^{n-j} \\
&= D_{rj,ks}^{(n-2)} e_1 \cdots e_{j-1}e_{j+1} \cdots e_{s-1}e_{s+1} \cdots e_n e_s (-1)^{n-j} \\
&= D_{rj,ks}^{(n-2)} e_1 \cdots e_{j-1}e_{j+1} \cdots e_{s-1}e_s e_{s+1} \cdots e_n (-1)^{n-j} (-1)^{n-s} \\
&= D_{rj,ks}^{(n-2)} e_1 \cdots e_{j-1}e_{j+1} \cdots e_n (-1)^{j+s} \\
&= (-1)^{j+s} D_{rj,ks}^{(n-2)}
\end{aligned} \tag{11}$$

となる．上の変形で，最後尾の  $e_s$  を  $e_{s+1}$  の前まで互換で移動するとき， $k < s$  であるから，互換の数は  $n-s$  回である．これから  $(-1)^{n-s}$  の因子が付加されている．

以上から， $a_{1s}, a_{2s}, \cdots, a_{r-1,s}, a_{r+1,s}, \cdots, a_{ns}$  を  $n-1$  個の変数とみなして 1 次形式に関する偏微分の式を利用すると， $k = s$  は除いて，

$$\begin{aligned}
D_{rk}^{(n-1)} &= a_{1s} \frac{\partial D_{rk}^{(n-1)}}{\partial a_{1s}} + a_{2s} \frac{\partial D_{rk}^{(n-1)}}{\partial a_{2s}} + \cdots + a_{r-1,s} \frac{\partial D_{rk}^{(n-1)}}{\partial a_{r-1,s}} + a_{r+1,s} \frac{\partial D_{rk}^{(n-1)}}{\partial a_{r+1,s}} + \cdots + a_{ns} \frac{\partial D_{rk}^{(n-1)}}{\partial a_{ns}} \\
&= a_{1s} (-1)^{1+s} D_{r1,ks}^{(n-2)} + a_{2s} (-1)^{2+s} D_{r2,ks}^{(n-2)} + \cdots + a_{r-1,s} (-1)^{r-1+s} D_{r,r-1,ks}^{(n-2)} \\
&\quad + a_{r+1,s} (-1)^{r+1+s} D_{r,r+1,ks}^{(n-2)} + \cdots + a_{ns} (-1)^{n+s} D_{rn,ks}^{(n-2)} \\
&= \sum_{j=1, j \neq r}^n a_{js} (-1)^{j+s} D_{rj,ks}^{(n-2)}
\end{aligned} \tag{12}$$

これを式 (7) に代入する．そのとき，式 (12) は  $a_{1s}, a_{2s}, \cdots, a_{r-1,s}, a_{r+1,s}, \cdots, a_{ns}$  を変数とみなして偏微分展開をしているが，式 (7) の  $a_{r1} D_{r1}^{(n-1)}$  の項にはこれらの変数がないので，この項を除いた残りの項に式 (12) を代入することになる．そうすると，

$$\begin{aligned}
D^{(n)} &= (-1)^{r+1} a_{r1} D_{r1}^{(n-1)} + \cdots + (-1)^{r+s-1} a_{r,s-1} D_{r,s-1}^{(n-1)} \\
&\quad + (-1)^{r+s} a_{rs} D_{rs}^{(n-1)} + (-1)^{r+s+1} a_{r,s+1} D_{r,s+1}^{(n-1)} + \cdots + (-1)^{r+n} a_{rn} D_{rn}^{(n-1)} \\
&= (-1)^{r+1} a_{r1} \sum_{j=1, j \neq r}^n a_{js} (-1)^{j+s} D_{rj,1s}^{(n-2)} + \cdots + (-1)^{r+s-1} a_{r,s-1} \sum_{j=1, j \neq r}^n a_{js} (-1)^{j+s} D_{rj,1-s}^{(n-2)} \\
&\quad + (-1)^{r+s} a_{rs} D_{rs}^{(n-1)} + (-1)^{r+s+1} a_{r,s+1} \sum_{j=1, j \neq r}^n a_{js} (-1)^{j+s} D_{rj,s+1}^{(n-2)} + \cdots + (-1)^{r+n} a_{rn} \sum_{j=1, j \neq r}^n a_{js} (-1)^{j+s} D_{rj,ns}^{(n-2)} \\
&= \sum_{k=1, k \neq s}^n (-1)^{r+k} a_{rk} \sum_{j=1, j \neq r}^n a_{js} (-1)^{j+s} D_{rj,ks}^{(n-2)} + (-1)^{r+s} a_{rs} D_{rs}^{(n-1)} \\
&= (-1)^{r+s} a_{rs} D_{rs}^{(n-1)} + \sum_{k=1, k \neq s}^n \sum_{j=1, j \neq r}^n (-1)^{r+k} (-1)^{j+s} a_{rk} a_{js} D_{rj,ks}^{(n-2)}
\end{aligned} \tag{13}$$

となることがわかる．以上は式 (9) で  $s > k$  のときであった．

[2]  $s < k$  のとき

次に， $s < k$  の場合について，異なるのは，式 (11) で  $e_s$  を  $e_{s+1}$  の前に互換で移動するときである．今の場合は  $s < k$  であるので， $e_{s+1}$  と  $e_n$  の間には  $e_k$  が抜けているから互換の数が 1 回少ないことになる．その結果，式 (11) は

$$\frac{\partial D_{rk}^{(n-1)}}{\partial a_{js}} = (-1)^{j+s-1} D_{rj,ks}^{(n-2)} \tag{14}$$

となり符号が変わる．式 (14) を式 (7) に適用するときは， $-1$  の指数部分の  $s$  が  $s-1$  になるだけであるから，式 (13) で代入された部分の指数の  $s$  を  $s-1$  に置き換えるだけである．すなわち，以下ようになる．

$$D^{(n)} = (-1)^{r+s} a_{rs} D_{rs}^{(n-1)} + \sum_{k=1, k \neq s}^n \sum_{j=1, j \neq r}^n (-1)^{r+k} (-1)^{j+s-1} a_{rk} a_{js} D_{rj, ks}^{(n-2)} \quad (15)$$

である．以上で式 (1) の Cauchy の定理は導かれた．

## 4 例

### 4.1 例 1

$$D = \begin{vmatrix} b_{pq} & a_{p1} & a_{p2} & \cdots \\ b_{1q} & a_{11} & a_{12} & \cdots \\ b_{2q} & a_{21} & a_{22} & \cdots \\ \cdots & \cdots & \cdots & \cdots \end{vmatrix}, \quad A = \begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots \\ a_{21} & a_{22} & \cdots \\ \cdots & \cdots & \cdots \end{vmatrix} \quad (16)$$

とする． $D$  の第 1 行  $b_{pj}$  と第 1 列  $b_{iq}$  は  $A$  の境界を作っている．このような境界がある行列式の計算に Cauchy の定理は有用である．式 (1) から

$$D = b_{pq} - \sum_{k,i} b_{pk} b_{iq} A_{ik} \quad (17)$$

となる． $A_{ik}$  は  $a_{ik}$  の補小行列式である．

### 4.2 例 2

$$D = \begin{vmatrix} x_1 & a_2 & a_3 & \cdots & a_n \\ a_1 & x_2 & a_3 & \cdots & a_n \\ a_1 & a_2 & x_3 & \cdots & a_n \\ \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots \\ a_1 & a_2 & a_3 & \cdots & x_n \end{vmatrix} \quad (18)$$

この行列式に次のように第 1 列と第 1 行を追加しても値は変わらない．

$$D = \begin{vmatrix} 1 & 0 & 0 & 0 & \cdots \\ 1 & x_1 & a_2 & a_3 & \cdots \\ 1 & a_1 & x_2 & a_3 & \cdots \\ 1 & a_1 & a_2 & x_3 & \cdots \\ \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots \end{vmatrix} \quad (19)$$

第 1 行に  $a_i$  を掛けて第  $i$  列から引くことをすべての列について行くと，

$$D = \begin{vmatrix} 1 & -a_1 & -a_2 & -a_3 & \cdots \\ 1 & x_1 - a_1 & 0 & 0 & \cdots \\ 1 & 0 & x_2 - a_2 & 0 & \cdots \\ 1 & 0 & 0 & x_3 - a_3 & \cdots \\ \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots \end{vmatrix} \quad (20)$$

となる．この行列式の第 1 行第 1 列の補小行列式は

$$D_{11} = \begin{vmatrix} x_1 - a_1 & 0 & 0 & \cdots \\ 0 & x_2 - a_2 & 0 & \cdots \\ 0 & 0 & x_3 - a_3 & \cdots \\ \cdots & \cdots & \cdots & \cdots \end{vmatrix} \quad (21)$$

である．かつ，行列式  $D_{11}$  の  $n - 1$  次小行列式は対角成分の補小行列式以外はすべて 0 である．したがって，Cauchy の定理により，

$$D = \prod_{i=1}^n (x_i - a_i) + \sum_{i=1}^n \prod_{j \neq i}^n (x_j - a_j) \quad (22)$$

となる．

## 参考文献

- [1] Robert Forsyth Scott, “A Treatise on the Theory of Determinants and Their Applications in Analysis and Geometry”, Cambridge at the University Press, 1880.  
<http://www.totoha.net/archiv/scott1880.pdf>
- [2] <https://mathworld.wolfram.com/CauchysDeterminantTheorem.html>
- [3] 「行列式展開の一般式」(2020/8/12 のエントリー)  
[http://totoha.web.fc2.com/determinant\\_expand.pdf](http://totoha.web.fc2.com/determinant_expand.pdf)